

慰め研究の概観と展望： 「慰めをする人」と「慰めを受ける人」の視点から

小 川 翔 大*

はじめに

人は泣いたり落ち込んでいる人に対して慰めをする。慰め方の種類は、励まし（「大丈夫だよ」、「落ち込む事じゃないよ」など）や共感（「わかっている」、「一緒だよ」など）の言葉かけや、身体接触といった非言語的行動（肩に手をおく、抱きしめるなど）などがある（小川・中澤，2014）。

慰めに関する研究は、向社会的行動（Eisenberg & Mussen, 1989；Lennon & Eisenberg, 1987；岩立，1995 など）や情緒的サポート（Schaefer, Coyne, & Lazarus, 1981；周，1993 など）といった大きな分類の中の一部として扱われることがほとんどである。例えば、向社会的行動は「他の個人や集団を助けようとしたり、人々のためになることをしようとしてなされた自主的な行動」（Eisenberg & Mussen, 1989）と定義され、慰め以外にも、寄与行動、分配行動なども含まれる。また、情緒的サポートは「ストレスに苦しむ人の傷ついた自尊心や情緒に働きかけてその傷を癒し、自ら積極的に問題解決に当たれるような状態に戻すような働きかけ」（浦，1992）と定義され、慰め以外にも、愛情を示す事、相談に乗る事なども含まれる。慰めはその他の行動と一括して論じられることが多く、慰めを明確に定義した研究や、慰めだけに焦点を当てた研究はあまり行われてこなかった。

しかし、慰めには他の向社会的行動や情緒的サポートとは異なる特徴が数多くある。例えば、向社会的行動や情緒的サポートは、行動の動機を問わないが（例えば、ボランティア参加によって大学の単位が取得で

きるなど）、慰めは同情を感じる事が主な動機となる（Hoffman, 2000）。同情は、落ち込んでいる相手に対して「かわいそう」「気の毒」「不憫」と感じることで、相手の苦しみを軽減させたいという感情である（Wispe, 1986）。そのため、慰めをした場合、慰めの送り手と受け手の間には情緒的に深い相互作用が生じている。慰めによる相互作用は受け手の感情に与える影響も大きく、慰めによって抑うつ解消、安心感や幸せな気分が高まることが示されている（Bylsma, Vingerhoets, & Rottenberg, 2008）。また、慰めは心理状態の悪い人に対して生じる場合が多く、受け手を傷つけてしまうリスクが高いため、特に受け手への配慮を必要とする行為だと考えられている（黒川，2001）。

以上を踏まえ本稿では、慰めに関する研究を整理し、受け手にとってより良い慰めを検討するための課題について考察することを目的とする。向社会的行動研究では主に「向社会的行動をする人」に焦点を当てており、その行動の生起条件や発達的变化などの検討が行われてきた。情緒的サポート研究では「サポートを受ける人」に焦点を当てており、そのサポートを受ける事への評価や、サポート効果に影響する要因などの検討が行われてきた。それに対して慰めは二者間の相互作用によって生じる行動であるため、本稿では「慰めをする人」と「慰めを受ける人」の二つの軸からレビューを行い、それらの知見を総合して考察を行う。

* おがわ しょうた 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）教育構造論講座

キーワード：非言語的な慰め／向社会的行動／ソーシャルサポート／励まし／互恵的関係

慰めの定義

慰め研究を概観する前に、まずは慰めの定義を明確にする。まず、「慰め」と類似した言葉として「励まし」がある。慰めと励ましは、両方とも受け手の不快な感情の軽減を目的としているが、慰めは受け手の気持ちを落ち着かせること、励ましは受け手を奮い立たせて何らかの行為を行わせることに主眼を置いている(田中, 2012)。意味論的には慰めと励ましを区別して扱うべきだが、実際の会話場面では曖昧なニュアンスの発言も多く、明確に区別することが難しいため、慰めと励ましが一括して論じられている(例えば、黒川, 2001; 中野・正保, 2011; 関山, 1998)。

以上より、慰めは向社会的行動や情緒的サポートの一つであり、受け手の不快な感情の軽減を目的とすることを踏まえて、慰めを「何らかの困難に直面している個人を見た時、その個人の不快感を軽減して心理的状态を回復させることを目的に行われる言語的・非言語的行動」と定義する。本稿では慰め方の種類を、小川・中澤(2014)で挙げられているような、励ましや共感の言葉かけや、身体接触といった、慰めをする人から相手に働きかける行動とする。以下ではこの定義と慰め方に該当する研究を中心に概観していく。

「慰めをする人」に焦点を当てた研究

1. 慰めの生物学的意義と発達

慰めの生物学的意義 慰めは社会を形成する人間の根底を成す重要な行為である。近年ではチンパンジー(Romero, Castellanos, & de Waal, 2010; Romero & de Waal, 2010), ボノボ(Clay & de Waal, 2013; Palagi, Paoli, & Borgognini Tarli, 2004)といった、人間と共通の祖先を持つ類人猿でも苦しんでいる個体に対して慰めを行い、親密な個体との良好な関係を維持していることが明らかになっている。これらの動物も人間と同様に、苦しんでいる個体に対して同情を感じていることが行動の動機であると考えられている(de Waal, 2009)。

動物の慰め研究では、自然観察場面で見られる社会的葛藤後の行動(post conflict: PC)と社会的葛藤のない場面での行動(matched control: MC)を比較するPC-MC法

(de Waal & Yoshihara, 1983)を用いた慰め行動の検討が行われている。PC-MC法は、まず二体の個体が争いをした直後、その争いを見ていた第三の個体が争いに負けた個体に対して近寄ってくっつくといった親和的行動を行うまでの時間を記録する(PCデータ)。次に、別の日の同じ時間にその第三の個体を観察し、観察開始から親和的行動が行われるまでの時間を記録する(MCデータ)。このPCデータとMCデータを1つのペアとして、親和的行動がMCデータよりPCデータで早く生じていれば、その動物は負けた個体の苦しみを軽減するために慰めをおこなったと仮定している(Romero & de Waal, 2010)。PC-MC方法によって、チンパンジーでは親密な個体に、「優しく触れる」、「キスする」、「抱擁する」など、身体接触による慰め行動を行う事が報告されている(Romero, et al., 2010; Romero & de Waal, 2010)。特に、慰め行動は、普段から親和的行動が多い親密な個体が争いに負けた時の方が、親密でない個体が争いに負けた時よりも多くみられた(Romero & de Waal, 2010)。

このような動物の行動は、一般的に血縁淘汰理論に基づいて生じることが示されている(血縁淘汰理論については、Griffin & West, 2002; 田中, 2006を参照)。しかし類人猿は、血縁関係者だけでなく非血縁者に慰めを行うことがある。例えば、チンパンジーは争いに負けた個体が血縁関係もしくは非血縁関係のどちらであっても、自分を慰めてくれた個体には、自分に慰めをしなかった個体よりも後の機会に慰めを行うことが多かった(Romero, et al., 2010)。すなわち、チンパンジーは血縁淘汰の理由だけで慰めをしているのではなく、親密な非血縁関係の個体との互恵的関係を維持するために慰めを行うといえる。

では、チンパンジーと人間の互恵的関係はどのような共通点と相違点があるのだろうか。非血縁関係のチンパンジーの互恵性を実験的に検討したYamamoto & Tanaka(2009)では、チンパンジーは相手から要求があった場合に利他的行動を行うことを示した。Yamamoto & Tanaka(2009)は、自動販売機を設置した2つのブース(間には直径20cmの穴がつけられた透明なパネル壁と開閉可能な間仕切りがある)にチンパンジーを一体ずつ待機させ、片方の部屋にコインが投入されると、もう片方の部屋から食物が出てくる実験場面を設定した(お互い

に利益を得るためには交互にコインを投入しなくてはならない。この実験で、互いのチンパンジーが自由にコインを投入できる条件下では、どちらもコインを投入せずに食物を得られない状態が続いた。しかし、コインを投入しない相手に、ブース間の穴から手を伸ばして働きかけた場合、働きかけられたチンパンジーは一時的にコインを投入した。

山本（2010）はチンパンジーの利他・互惠性の進化的基盤について、チンパンジーは、相手の要求に応じた利他行動を行うが、自発的な利他行動は行わないと考察している。互惠的關係を形成したチンパンジー間では、争いに負けて慰めを必要としている相手の状態（泣き叫ぶなど）を受けて、その相手に対して慰めをしたと考えられる。そして山本（2010）は、人間もチンパンジーと同様に、相手の要求に応じた利他行動を進化的基盤として持っているが、更なる進化の過程で心の理論や認知的発達加わり、自発的な利他行動を行うようになったと考察している。

慰めの発達 人間の慰め研究では、2歳頃には他者への慰め行動が生じることが示されている（加藤・大西・金澤・日野林・南，2012；Zahn-Waxler & Radke-Yarrow, 1982；Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner, & Chapman, 1992）。例えば、加藤ら（2012）は2歳児を対象に、泣いている他児との相互作用を観察した結果、151回の相互作用の内39回で慰め行動（頭をなでる、おもちゃを渡すなど）を観察した。さらにその観察の中で加藤ら（2012）は、どのような特徴をもった子どもが慰めを受けやすいのかを検討した。その結果、親密な関係の幼児ほど泣いている時に慰められる頻度が多く、攻撃性の高い子どもや普段から泣きやすい子どもは、慰められる頻度が少なかった。子どもの攻撃性が高い場合は自分に危害を加える恐れが高くなり、子どもが普段から泣いてばかりいる場合はその子に対して慰めをする機会が多くなってしまふ。そのような子どもに対しては自分が慰めをするというコストを払ってもその分の利益が期待できないため、慰め行動が少なくなったのだろう。これに対し、普段から親密な子どもとの間ではバランスの良い互惠的關係を築くことができるため（Fujisawa, Kutsukake, & Hasegawa, 2008）、慰めの頻度が多くなったのだろう。

また、実際に観察される慰め行動の頻度は4歳から5歳にかけて急激に増加することが示されている。Fujisawa, et al. (2006) は、幼稚園児を対象に約2年間に渡ってPC-MC法を用いて慰め行動（相手に優しく触れるなど）の頻度を記録した。1年目（T1）は3歳児と4歳児、2年目（T2）は4歳児と5歳児となった1年目と同じクラス集団を観察対象として、年齢による慰め行動の頻度を比較した。その結果、慰め行動の頻度は3歳児（T1）と4歳児（T2）、4歳児（T1）と4歳児（T2）の間では差がみられなかったが、4歳児（T1）と5歳児（T2）の間で5歳児の方が有意に多かった。

4歳から5歳にかけて慰め行動の頻度が増加した背景には、子どもの認知的発達が影響していると考えられる。溝口（2011）は、4歳児では状況をみて直接確認できる被害の有無が慰めをする判断基準となるが、5歳児では泣いている人の心理的状态（悲しんでいるかどうか）が慰めをする判断基準となっていることを示した。この結果は、4歳では泣いている人の心理状態の推測がまだ困難であるが、5歳になると泣いている相手の心理状態の推測が容易となったためだろう。

この認知的発達により、人間の慰め行動の生起に関する要因はより複雑になると考えられる。チンパンジーの場合、実際に泣き叫んでいる個体を見れば、それに応じて慰めをするが、人間はそのような行動を見なくても相手の置かれた状況などから相手の不快な気持ちを想像して慰めができるようになると考えられる。他にも人間は見ず知らずの相手にも慰めをする場合があり、慰めをする状況や相手にも様々なバリエーションが生じる。また、慰め方の特徴は、幼児期では主に泣いている相手に近づいたり、優しく触れたりするなど、物理的な接触による慰めが多かったが、児童期以降では落ち込んでいる相手に対して非言語的な慰めだけでなく、言語的な慰めも増加していく（Zahn-Waxler, Friendman, & Cummings, 1983）。

2. 慰め行動に影響する要因

慰め行動を促進する要因には、上述した相手との親密さといった関係性の要因（Fujisawa, et al., 2006；加藤ら，2012）や相手の心理状態への共感性といった個人内要因（Hoffman, 2000；溝口，2011）などが挙げられる。

しかし、児童期以降の慰め行動の頻度には性別、状況要因、社会的要因など、他にも様々な要因が複雑に影響してくると考えられる。以下ではそれらの要因に関する慰め研究を概観していく。

(1) 性別の要因 慰めに限らず幅広い向社会的行動に関する研究では、幼児期から児童期にかけては一貫した性差はみられていない (Underwood & Moore, 1982)。これに対して青年期以降の慰め研究では、慰めの言葉かけの量は、男性よりも女性の方が多いたことが示されている (黒川, 2001; 関山, 1998)。例えば、関山 (1998) は大学生を対象に質問紙調査を行い、ネガティブな状況の人 (例えば、ゼミで激しく批判された、父親が亡くなったなど計6場面) に対する言葉かけを回答してもらい、その内容を分類した。その結果、男性は冗談を言う、話題を変えろといった直接的な慰めにならない言葉かけが最も多かったが、女性は共感や同情の言葉かけや励ましの言葉かけが最も多かった。このような性差が生じる背景には、生物学的基盤のほかに、親をはじめとする周囲の人々からの発達期待や育て方などが影響していると考えられている (伊藤, 1997)。

(2) 状況の要因 慰めは同情を感じることを主な動機となっているため (Hoffman, 2000)、慰め行動の生起には同情の感じやすさが影響していると考えられる。この同情の感じやすさは状況に対する統制可能性 (その状況が生じた原因がその人の意志や努力によって変わりうる程度) の認知によって異なることが示されている (Weiner, 1980; Weiner, Graham, & Chandler, 1982)。例えば、Weiner (1980) は大学生にクラスメイトが先週の授業のノートを借りたいと申し出た場面を想定させ、ノートを借りる理由をビーチで遊んでいたため授業をさぼったとする条件と、目の治療のため先週はずっと黒板が見えなかったとする条件にわけ、これらの条件でクラスメイトに怒りと同情をどの程度感じるかを回答させた。その結果、ビーチで遊んでいた条件では怒りを感じ、目の治療の条件では同情を感じていた。ビーチで遊んでいた条件では、その人は自分の意志でビーチに遊びに行っており、その人がビーチで遊ばずに授業に出ている問題はなかったため、ノートを借りる申し出に対して被験者は怒りを感じたと考えられる。また、目の治療の条件では、その人の意志や努力で黒板が見えるようにはならな

かったので、被験者は同情を感じたと考えられる。

さらにWeiner, Graham, & Chandler (1982) は、大学生に日常生活で同情した例を想起させてどのような状況で同情を感じるのかを調べた。その結果、大学生が同情した状況で、最も頻繁に報告されたのは身体に障害のある人を見た時であった。すなわち、同情は自分の力では困難な状況を改善できない人を見た時により強く生じると言える。

(3) 社会的要因 同情は慰め行動の生起には欠かせない感情であるが、同情を感じることは必ずしも慰め行動の生起につながるわけではない。児童期になった頃には、様々な対人的経験をしており、社会的環境や文化の影響を受けて道徳的な価値観が形成されている。特に日本は他の文化よりも、相手の気持ちを重んじる風潮があり、行動に表れない思い遣りが重要視される傾向にある (レビューとして坂井, 2006)。

例えば、山村 (2013) は小学4年生、小学6年生、大学生を対象に、休み時間に校庭の陰で友だちが泣いている物語を提示し、その場面でのどのような行動をするのかを「すぐに声をかける」、「先生や友だちを呼ぶ」、「そっとしておく」の3つから選択させて、その選択理由を尋ねた。そして、「そっとしておく」と答えた回答者に焦点を絞り、その理由を道徳的判断水準に基づいて分類した。その結果、すべての年齢で「泣いているところを見られたくなさそう」といった相手が傷つくことを懸念した理由は、「泣いている人に関わるのが嫌だ」といった利己的な理由や「そっとしておいた方がいいと思う」といった規範的な理由よりも多かった。このように、児童期以降では慰めを受けた人の心理状態をより深く推測し、慰めをしたら相手が傷つくかもしれない場合を想定して、慰め行動が抑制される場合もある。

以上を踏まえると、人が慰め行動を行うかどうかは、慰めが相手にとって効果的に働くかどうかの判断が一つの鍵となるだろう。すでに小学4年生で、慰めは受け手に必ずしもポジティブに働くわけではない事を理解していると言える。では、慰めを受ける立場から見た場合、実際に慰めを受けた時にどのような評価や感情が生じるのだろうか。

「慰めを受ける人」に焦点を当てた研究

人は自我発達や認知的発達に伴い、慰めを受ける時には、相手が慰めをした理由や、相手の自分に対する評価などについて、様々な情報を手掛かりに推測するようになる。そのため、慰めが受け手にとってポジティブまたはネガティブのどちらに働くかは、慰められた時に受け手がどのような評価（認識）をするかによって決まると考えられる。以下では、慰めが受け手にポジティブ・ネガティブに働くメカニズムを概観し、慰めを受けた時に生じる受け手の評価や感情についてまとめる。次に、これらの評価や感情に影響すると考えられる要因を整理していく。

1. ポジティブな結果が生じるメカニズム

親密な人との互恵的関係において、相手から慰めを受ける事は自然なことである。ソーシャルサポート研究において、Dakof & Taylor (1990) は、がん患者に面接をして、サポートをしてくれた人、サポートの内容、サポートの有益さ、サポートの頻度などを調べた。その結果、がん患者は配偶者、家族、友人など、親密な人からの情緒的サポート（慰めだけではなく、愛情を示すなども含む）を有益とみなす事が明らかになった。逆に、親密な人から情緒的サポートがない場合、がん患者はその人との関係は有益でないとなっていた。他にも、稲葉 (1998) はサポートが欠如していることの受け手に与えるマイナスの効果の仮説として文脈モデルを提示し、親密な人にはサポートを強く期待しているが、サポートが得られない場合は心理的不満が生じると述べている。

中村・浦 (1999) は、文脈モデルを実証的に検討するため、大学新入学生を対象に4月にサポート期待やサポート源（父親、母親、大学入学後にできた学内の友人、大学入学以前から親しい学外の友人）などを調査し、後の7月に実際のサポート受容、不適応度（抑うつ

傾向など）、自尊心などを調査した。その結果、大学入学以前から親しい学外の友人へのサポート期待が高かったが、実際にはその友人からのサポートが得られなかった場合、不適応度が高く自尊心が低い事が示された。この結果から、親密な人からサポートが得られない場合は互恵的関係が成り立たず、これまでに自分が慰めや様々な援助を相手に行った分のコストに見合った利益が得られないため、心理的不満が生じると考えられる。慰めも同様に、親密な人からの慰めであっても、その慰め方が受け手の期待していた慰め方と合致していない場合、相手の慰めでは十分な利益を得られないと感じて、心理的不満が生じる可能性が考えられる。

以上を踏まえると、慰めは単に気持ちをなだめるだけではなく、特定の人との親密で互恵的な関係を確認する行為でもあったと考えられる。この関係にある相手から受け手の期待に合った慰めを受けることで、相手が自分を理解して受け入れてくれていると評価でき、慰めの受け手は安心感を得ることができると考えられる。

2. ネガティブな結果が生じるメカニズム

慰めは受け手にとってネガティブにも働く。その原因は、慰められた時に相手が自分に同情していると感じるためである。同情を感じる程度の強さは、一般的に自分の力では困難な状況を改善できない人を見た時に最も強くなる (Weiner, Graham, & Chandler, 1982)。そのため、慰めの受け手は相手が自分に同情していると感じた場合、相手が同情した原因が自分自身の能力の低さにあると推論する (Graham, 1984; Weiner, Graham, Stern, & Lawson, 1982)。この推論によって、慰めは受け手に自分の能力の低さを強く感じさせ、自尊心を傷つけて抑うつ感情を高めてしまう (Blaine, Crocker, & Major, 1995)。慰めを受けた人が自分の能力不足を認識するプロセスをFigure1に示す。また、相手に自分の能力を低く評価されたと認識することで、相手は上の立場から自

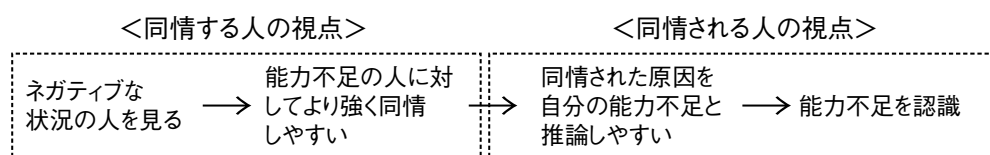


Figure1 同情された人が自分の能力不足を認識するプロセス

分を見下して馬鹿にしていると評価する可能性も考えられる。

以上を踏まえると、慰めが受け手にとってネガティブに働くかどうかは、慰めを受けることで自分自身の立場や能力が脅威にさらされたと評価するかどうかにあると言える。

3. ポジティブ・ネガティブな結果を左右する要因

慰めが受け手にとってポジティブに働くか、またはネガティブに働くかを左右する要因はどのようなものがあるのだろうか。以下では、その要因について検討した研究を概観する。

(1) 発達の要因

自我発達 乳幼児は自分の力で不快な感情をコントロールすることが得意ではないため、大人からの慰めは不快な感情を抑制するために必要となる(板倉, 2007)。例えば、小児科外来に通う子ども(3~6歳)と親53組の内、採血によって不快な感情になった後に親への身体接触を求める子どもは28名おり、その子どもに対して慰めをする親は20名いた(山口・堀田, 2012)。大人の微笑みかけや抱っこといった慰めが乳幼児に安心感を与え、不快な感情を軽減することには多くの人が同意するだろう。

児童期以降では、慰めを含めた様々なサポートは受け手にネガティブな影響を与える可能性が高くなる(泉井, 2009)。例えば泉井(2009)は、援助を受けた時のお返しができないことで生じる不快感情の程度の発達的变化について横断的調査をした。初めに泉井(2009)は幼児を対象に面接を行い、人から助けてもらった際に不快感情などが生じるかを検討した。その結果、すべての幼児は助けてもらった時に嫌な気持ちはしないと回答し、自尊心の脅威も意識していなかった。次に泉井(2009)は、援助を受けた時のお返しができないことで生じる不快感情の程度やそれに影響する要因を検討するため、小学4年生、小学6年生、大学生に質問紙調査を行った。その結果、小学4年生から大学生まで同様に、不快感情は友達のお母さんよりも友達から援助を受けた時の方が高く、また、援助をするコストが高い場合の方が低い場合より高かった。この結果について泉井(2009)は、子どもたちは実際に自分でも他者への援助を行うよ

うになり、援助者の援助への負担を知ることができるようになる中で、被援助時の不快感情を抱くようになると考察している。

泉井(2009)では被援助時の不快感情に焦点を当てているため、慰めが受け手に与えるネガティブな影響を検討しているわけではない。しかしながら、慰めが受け手に与える影響についても同様の傾向が予想される。児童期中期の子どもは、自分自身の力で様々なことができるようになり、一方的に援助を受ける存在から自立した存在へと移行する状態だと考えられる。そのため、児童期以降では人から必要以上の慰めを受けることで、相手に自分の能力を過小評価されていると認識し始めるようになり、慰めが受け手にとってネガティブに働きだすだろう。

人間関係の発達 児童期以降の主なサポート源はこれまで依存していた親から同じ悩みや不安を抱える友人へと移行していく(尾見, 1999)。性的成熟による身体的変化や自我発達に伴って様々な不安やストレスを抱える青年期に入ると、青年は友人からの慰めといった情緒的サポートを強く期待し(Argyle & Henderson, 1984)、友人から慰めを受けることで安心感を得て、不安やストレスに上手く対処していく。

しかし、青年は友人と親密な関係を築きたいと思う反面、相手に嫌われることや相手を傷つけることを恐れており、友人との適度な心理的距離を常に模索し続けている(藤井, 2001)。特に青年の友人関係は、自分や相手が傷つくことを極端に恐れており、友人との心理的距離が遠いままになる傾向がある(福森・小川, 2006; 岡田, 2010)。

例えば、Glick & Rose(2011)はアメリカの3年生、5年生、7年生、9年生を対象に、秋(Time1)と春(Time2)の2回に渡り、もしも友人が授業発表で失敗した時に自分が友人に対して行う行動(慰めを含む言語的サポート、気晴らし行動、回避・非難行動)の程度と、実際にいる友人の数や質との関連を検討した。その結果、Time1で回避・非難行動をする程度が高い事は、Time2での少ない友数、友人関係の質の悪さを予測していた。さらに、Time1での友人の数の少なさは、Time2での回避・非難行動をする程度の高さを予測していた。すなわち、困っている友人への慰め行動を抑制すると、友人関係をさらに希薄化させ、さらにその後の慰め行動

も抑制されるという悪循環が生じていた。

友人との心理的距離を模索して悩む青年期において、相手を傷つける事を懸念して困っている友人に慰めをしないことは、友人関係の形成・維持という長期的な側面に対してもネガティブな影響を与え得ると言える。この問題点を解決するためにも、青年期においてどのような慰めが受け手にポジティブまたはネガティブに働くのかを明らかにすることは、重要な課題であるだろう。

(2) 出来事の要因

慰めを受けた時に生じる受け手の感情は、「ストレスフルな出来事の種類」によって異なる。例えば、小川（2011）は大学生を対象に場面想定法を用いて、ネガティブな出来事（風邪をひく、テストで失敗する、人に怒られる）が起きた時に「かわいそうだね、大丈夫？」と大学にいる同性の人から言われた時、各出来事で喜び感情（嬉しさ、安心など）、落ち込み感情（情けない、恥ずかしいなど）、反発感情（相手に対する怒り、苛立ち）の内、どの感情が高くなるのかを検討した。その結果、風邪をひく出来事と人に怒られる出来事では喜び感情が最も高くなったが、テストで失敗する出来事では落ち込み感情が最も高くなった。テストといった学業に関する内容は、普段の生活の中で友人と比較することが多い（Frey & Ruble, 1985）。そのため、同じ大学にいる人から慰めを受けることで、自分と相手との差を強く認識し、相手が自分の能力を低く評価していると推論することで、自尊心が傷つき落ち込み感情が高くなったと考えられる。テストで失敗するといった、自分の能力の低さが相手に伝わりやすい出来事では、慰めが受け手にとってネガティブに働きやすいと考えられる。

(3) 慰めを受ける人の個人内要因

出来事の原因帰属 慰められた時に生じる受け手の評価や感情に影響する個人内要因として、「出来事の原因帰属」がある。例えば、先ほど紹介した小川（2011）はストレスフルな出来事が起きた原因を内的帰属（自分の能力不足）した人と、外的帰属（自分以外の他者や運）した人で慰めを受けた時の感情の違いも検討した。その結果、内的帰属した人は外的帰属した人よりも慰められた時の落ち込み感情（情けない、恥ずかしいなど）が強かった。これは、内的帰属した人は相手に慰められた原因も自分の能力の低さにあると推測して、落ち込み感情

が強くなったと考えられる。

自尊心 慰められた時に生じる受け手の評価や感情に影響する個人内要因として、「自尊心の高低と変動性（不安定性）」がある。自尊心の高低とは個人の平均的な自尊心の高さであり、自尊心の変動性とは短期間での自尊心の変動のしやすさである（脇本, 2008）。

例えば青年期では、それまでの自己像が解体され、新たな自己像が再構成される時期であり、頻繁な自尊心の変動が見られる（Adelson & Doehrman, 1980）。また、自尊心を揺るがすストレスフルな出来事が自己の変容や成長につながるとの指摘もある（北村, 2011）。自尊心の高低・変動性と主観的幸福感の関連を検討した Paradise & Kernis（2002）は、自尊心が低く変動しやすい人は自尊心が低くて変動しにくい人より、主観的幸福感が高いことを示している。このようなストレスフルな出来事に直面した時、友人からの慰めは自尊心の回復を促すと考えられるが、自尊心の高低と変動性の組み合わせによって、慰めの受け手に与える影響は異なると予想される。

例えば市村（2011）は、自尊心の高低・変動性と自信を無くして落ち込んだ時に行う回復行動との関連を検討した。回復行動の種類は、開示行動（話を聞いてもらうなど）、気晴らし行動（意識的に楽しい事ばかりを話す）、受容希求行動（慰めてもらうなど）であった。その結果、自尊心が高く変動しやすい人は自尊心が高く変動しにくい人よりも開示行動が少なく、自尊心が低く変動しやすい人は自尊心が低く変動しにくい人よりも受容希求行動が多かった。開示行動の少ない人は、人に自分の弱い部分を見せる事をより脅威に感じてしまう傾向にあり、受容希求行動が多い人は、人に自分の弱い部分を見せる事の脅威よりも、人に自分を受け入れてもらうことを優先する傾向にあると言える。また、脇本（2008）は、自尊心の高低と変動性が被援助指向性や援助要請に与える影響を検討した。その結果、自尊心が変動しやすい群の内、自尊心が高い人は他者の援助を求めにくく、自尊心が低い人は援助を求めやすいことが示された。

これらの結果を踏まえると、自尊心が高く変動しやすい人は、人から慰めを受けることも脅威に感じやすく、慰めがネガティブに働くと考えられる。反対に、自尊心が低く変動しやすい人は、人からの慰めによって低下し

た自尊心が回復しやすく、慰めがポジティブに働くと考えられる。

(4) 慰めをする人の要因

慰め方 慰めをする人は慰めを受ける人が必要としている最適な「慰め方」を選択し、実行する必要がある。例えば、中野・正保(2011)は大学生を対象に、深刻な出来事(バイト先や学校でいじめにあった、大切な人が亡くなったなど)と深刻でない出来事(人前でうまく話せない、仲間との遊びの計画がつぶれたなど)で、家族や友人から受けた慰め方が異なるかを検討した。その結果、深刻な出来事は、深刻でない出来事よりも「つらいね」、「大変だったね」といった同情や理解を示す言葉かけを求める人が多く、「大丈夫」、「頑張れ」といった励ましの言葉かけを求める人は少なかった。

他にも、Samter, Burlison, & Murphy (1987)は、大学生に落ち込んだ友人を慰める会話を提示し、慰めた人に抱く印象を評定させた。慰めの会話の内容は、友人の気持ちを変えさせようとする言葉(他に大切なことがあるよなど)、相手に対する同情の言葉(かわいそうに思っているなど)、友人の気持ちを理解している共感の言葉(あなたは本当につらいと思うなど)を言った時の3つである。その結果、慰めた人が同情と共感の言葉を用いた時は友人の気持ちを変えさせようとする言葉を言った時よりも、好意的に評価された。これらの研究から、受け手にとってより良い慰め方は、出来事や慰めをする人といった様々な要因によって異なることが示唆される。

サポートの明瞭性 近年注目されている「サポートの明瞭性(慰めの受け手が相手からサポートを受けているという認識のしやすさ)」(Bolger & Amarel, 2007; Bolger, Zuckerman, & Kessler, 2000)から考えると、同情をしていることをはっきりと伝える慰め方は、受け手に相手より自分が下の立場にいることをより強く認識させ、ネガティブに働くと考えられる。同情がその受け手に能力の低さを推論させやすいことを踏まえると、あからさまに共感や同情を伝える慰めは、心理的距離の近い相手でのみポジティブに働くと考えられる。心理的距離が遠い相手の場合、同情を伝える慰め方は相手と自分の立場の違いをはっきりと認識させるため、受け手にとってネガティブに働くかもしれない。そのため、相手

との立場の違いを感じさせない「明瞭性の低い」慰め方について検討していく必要があるだろう。

(5) 関係性の要因

相手との親密性 慰めのように肯定・否定の二面性をもったサポートは、相手に抱く期待によって、慰めた相手が自分の気持ちを正確に理解しているかどうかに関する受け手の評価が異なる(源氏田・村田, 2007)。先ほど紹介した小川(2011)は、同性の大学の人を親しい人、あまり知らない人に分け、相手との親密さによって慰められた時の受け手の感情の違いも検討した。その結果、すべての出来事で、親しい人からの慰めはあまり知らない人からの慰めよりも喜び感情が高く、反発感情が低くなった。

大学生の場合、心理的距離が近い親しい人とは互いのことを理解して尊重したいという欲求も高くなるため(榎本, 2000)、慰められた時に相手が自分のことをよく理解していると評価して喜び感情が高くなったと考えられる。反対に、心理的距離が遠いあまり知らない人の場合、相手から慰めを受けることも期待していないと予想される。したがって、慰めの受け手は相手が自分のことを理解していないと評価し、単に相手が上から自分を見下しているように感じて反発感情が高くなったと考えられる。

社会的な上下関係 自分と相手が社会的な上下関係にある場合、慰めは受け手にネガティブに働きやすいと考えられる。例えば、Graham (1984)は教師が生徒(6年生)に対して、ある子ども達には達成課題で失敗したことに怒っていることを伝え、もう一方の子ども達には同情していることを伝える実験を行った。その結果、怒られた子どもよりも同情された子どもは自分に能力がないから失敗したと考え、今後の課題が成功できるという自分自身への期待が低くなった。さらに、Blaine, et al. (1995)は求職者の気持ちに立って回答を求めた質問紙調査で、人種差別や身体障害に対する同情によって求職者が雇用者に採用された時の方が、求職者の能力が認められて採用された時よりも仕事のやる気や自尊心が低く、敵意や抑うつ感情が高いことを示している。

Graham (1984)とBlaine, et al. (1995)は、どちらも社会的に上の立場の相手から同情を示す慰めを受けている。一般的に、社会的に上の立場の人に対しては、自分

に対する同情といった情緒的なつながりよりも、自分の能力を高く評価してもらうことを期待していると考えられる。そのため、上の立場の人が同情を示す慰めをすることは、受け手に自分の能力を低く評価されたと認識させてしまい、上の立場の人に対する期待と合致しないため、受け手にとってネガティブに働いたと考えられる。

4. 慰めが受け手に与える影響の指標

慰めの受け手に焦点を当てた研究では、慰めの受け手に生じる影響を測定する指標として様々なものが用いられている。例えば、慰めた人への印象評価 (Samter, et al., 1987), サポートの有益性の評価 (Dakof & Taylor, 1990), 能力への脅威の評価 (Graham, 1984), 慰められた直後の感情 (小川, 2011), やる気 (Blaine, Crocker, & Major, 1995) などがある。これらの指標は大別すると、主に感情的側面の指標 (やる気, 敵意, 恥, 感謝など) と評価的側面の指標 (印象, 有益性, 能力への脅威の評価など) に分けることができる。

本来、慰めを行う目的は「個人の不快感の軽減や、心理的状態の回復」であり、慰めを受けた時に生じる感情を測定指標とすることは理にかなっている。例えば、ポジティブ感情になる事は、ストレスによって生じた生理的反応 (心拍率の上昇など) が元の状態により早く回復することを促したり (Fredrickson & Joiner, 2002), さらにストレスとなる出来事を前向きに捉え、多面的な情報処理を促すことなども示されている (レビューとして山崎, 2006)。

しかし、慰めが受け手の感情に影響する要因は数多く、様々な側面の要因が複雑に絡み合っている。そのため、感情だけを測定指標にした場合、その感情がなぜ生じたのかという詳細な理由は明らかにならない。また、慰めを受けた時の感情は、単にポジティブ感情かネガティブ感情のどちらかに分かれるのではなく、相手の気持ちは嬉しいが慰められる自分は情けないというように、複雑な感情が生じる可能性もある。

そのため、慰めの受け手に焦点を当てた研究を行うにあたり、評価的側面と感情的側面の両方の指標を用いることが重要だろう。慰めを受けた時の評価と感情の関連は、認知的評価理論によって説明することが可能である。認知的評価理論では、出来事や状況に対する評価

によって、生じる感情の質が決定されると考える (この理論の研究は Lazarus & Folkman, 1984; Weiner, 1985 など)。「要因」と「感情」だけでなく、その間を媒介する「評価」についても併せて検討することで、慰めが受け手に与える影響のより詳細なメカニズムが解明されるであろう。

問題提起と今後の課題

本稿では、「慰めをする人」と「慰めを受ける人」の二つの軸から慰め研究をレビューした。「慰めをする人」の研究では、慰めは苦しんでいる人のストレスを緩和するだけではなく、親密な人との互恵的関係の維持にも貢献していることを考察した。しかし、児童期以降では慰め行動の生起に様々な要因が影響し、友人に対する慰め行動が抑制されることも示された (山村, 2013)。

「慰めを受ける人」の研究では、慰めが受け手にとってポジティブ・ネガティブに働くメカニズムを整理し、慰めの受け手に生じる評価や感情に影響する要因について概観してきた。また、稲葉 (1998) や中村・浦 (1999) より、親しい人が慰めをしてくれない場合では、慰めてほしいという受け手の期待と合致せずに、ネガティブ感情が生じると考察した。これらの研究を統合すると、慰めは受け手を傷つける懸念によって抑制される傾向にあるが、親密な関係の人に対して慰めをしないことは受け手の期待と合致しないという問題点が挙げられる。しかし、青年期の場合は友人とはいえ、その心理的距離を模索している状態にあるため (藤井, 2001), その慰め方については十分考慮する必要がある。したがって、落ち込んでいる人にただ何もしないのではなく、相手に自分の共感や同情の気持ちを伝え、さらに相手を傷つけない慰めを考えていく必要がある。以下では、慰め研究の今後の展望をまとめる。

まず、「慰めをする人」の研究において、慰め行動が抑制される社会的要因として対人的経験、社会的環境、文化などを挙げているが、それらと慰め行動との関連を実証的に検討することが必要である。特に、児童期中期には親しい友人に対して慰め行動を抑制する価値観がすでに形成されるので、それ以前の発達段階でそれらの要因と慰め行動との関連を検討する必要があるだろう。現

代の子どもは泣いている人をみても慰めたら相手は嫌な気持ちになると思って声をかけない子どもや、慰めたくても慰め方がわからず何もできない子どもが多くいるという指摘もある(遠藤, 2000)。このような子ども達は、友人関係の中で互いに支え合う機会も少なくなり、相手の気持ちに立ち入らず、青年期以降でも葛藤を伴わない表面的な友人関係を形成する可能性が高まるだろう。慰め行動の促進・抑制要因を明らかにすることは、そのような子どもが泣いている友人により良い慰め方を選択して実行できるようにする教育的アプローチの考案の一助になるだろう。

次に、「慰めを受ける人」の研究においては、慰めの受け手に生じる評価や感情に影響する要因は数多くあり、それらは複雑に絡み合っていると考えられる。例えば、小川(2011)では、親密な人からの慰めは受け手にとってポジティブに働きやすいが、「ストレスフルな出来事の種類」によってはネガティブな影響も生じることも示した。慰めは親密な関係を維持していくためにも不可欠な行動であるため、今後は親密な関係の中で生じる慰めに焦点を当てて、慰めがポジティブ・ネガティブに働く要因を詳細に検討していく必要があるだろう。また、慰めがポジティブに働くためのメカニズムについて、稲葉(1998)や中村・浦(1999)では、全般的な親しい人へのサポート期待しか言及しておらず、サポートを期待する場面や状況の違いを考慮していない。小川・中澤(2014)では、親しい友人からの慰めの期待をインタビューで尋ねた結果、深刻度や出来事の種類など、場面によって友人への期待が異なるという回答も得られた。慰めは受け手に感情的な葛藤を生じやすく、様々な要因によって受け手に与える影響が異なるため、親しい友人への期待の中身をより詳細に検討し、慰められた時の評価や感情との関連も実証的に検討していく必要があるだろう。

また、動物や幼児の慰めは、「一緒にいる」、「優しく触れる」といった非言語的行動が示されており、これは人間の大人においても有効な方法であると考えられる。この非言語的な慰めは、自分も同じ気持ちになっていることや心配していることを暗黙裡に相手に伝えることができる。また、言語的な慰めや物理的な援助を受けた時よりも、相手は自分が援助を受けているという「サポー

ト明瞭性」が低く、受け手に与えるネガティブな影響を弱めることができると考えられる。今後は、そのような明瞭性の低い非言語的な慰めに注目することも必要である。このような相手を傷つけにくい慰め方を明らかにすることは、慰めが持つ本来の意義や人間関係にもたらす様々な恩恵を最大限に発揮していくためにも重要なことだろう。

謝辞

本論文作成にあたり指導して下さった中澤潤教授(千葉大学)に心より感謝申し上げます。また、多くの貴重なご助言をして下さった皆様にも、心より感謝申し上げます。

文献

- Adelson, J., & Doehrman, M. J. (1980). The psychodynamic approach to adolescence. In J. Adelson (Ed.) *Handbook of adolescent psychology*. New York: Wiley, pp.99-116.
- Argyle, M., & Henderson, M. (1984). The rules of friendship. *Journal of Social and Personal Relationships*, **1**, 211-237.
- Blaine, B., Crocker, J., & Major, B. (1995). The unintended negative consequences of sympathy for the stigmatized. *Journal of Applied Social Psychology*, **25**, 889-905.
- Bolger, N., & Amarel, D. (2007). Effects of social support visibility on adjustment to stress: Experimental evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 458-475.
- Bolger, N., Zuckerman, A., & Kessler, R. C. (2000). Invisible support and adjustment to stress. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 953-961.
- Bylsma, L. M., Vingerhoets, A.J.J.M., & Rottenberg, J. (2008). When is crying cathartic? An international study. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **27**, 1165-1187.
- Clay, Z., & de Waal, F. B. M. (2013). Development of socio-emotional competence in bonobos. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, **110**, 18121-18126.

- Dakof, G. A., & Taylor, S. E. (1990). Victims' perceptions of social support: What is helpful from whom? *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 80-89.
- de Waal, F. B. M. (2009). *The age of empathy: Nature's lessons for a kinder society*. New York: Crown Publishing Group.
- (柴田裕之 (訳) (2010). 共感の時代へ—動物行動学が教えてくれること 紀伊国屋書店)
- de Waal, F. B. M., & Yoshihara, D. (1983). Reconciliation and redirected affection in rhesus monkeys. *Behaviour*, **85**, 224-241.
- Eisenberg, N., & Mussen, P. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (菊池章夫・二宮克美 (訳) (1991). 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- 遠藤利彦 (2000). 思いやりの「ある・なし」とはどういうことか—気持ちと言動の不一致. 児童心理, **54**, 128-137.
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. 教育心理学研究, **48**, 444-453.
- Fredrickson, B. L., & Joiner, T. (2002). Positive emotions trigger upward spirals toward emotional well-being. *Psychological Science*, **13**, 172-175.
- Frey, K. S., & Ruble, D. N. (1985). What children say when the teacher is not around: Conflicting goals in social comparison and performance assessment in the classroom. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 550-562.
- 藤井恭子 (2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析. 教育心理学研究, **49**, 146-155.
- Fujisawa, K. K., Kutsukake, N., & Hasegawa, T. (2006). Peacemaking and consolation in Japanese preschoolers witnessing peer aggression. *Journal of Comparative Psychology*, **120**, 48-57.
- Fujisawa, K. K., Kutsukake, N., & Hasegawa, T. (2008). Reciprocity of prosocial behavior in Japanese preschool children. *International Journal of Behavioral Development*, **32**, 89-97.
- 福森崇貴・小川俊樹 (2006). 青年期における不快情動の回避が友人関係に及ぼす影響—自己開示に伴う傷つきの予測を媒介要因として. パーソナリティ研究, **15**, 13-19.
- 源氏田憲一・村田光二 (2007). 共感的メッセージは本当に効果的なのか?—送り手の印象への影響を中心に. 対人社会心理学研究, **7**, 21-29.
- Glick, G.C., & Rose, A.J. (2011). Prospective associations between friendship adjustment and social strategies: Friendship as a context for building social skills. *Developmental Psychology*, **47**, 1117-1132.
- Graham, S. (1984). Communicating sympathy and anger to black and white children: The cognitive (attributional) consequence of affective cues. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 40-54.
- Griffin, A. S., & West, S. A. (2002). Kin selection: Fact and fiction. *Trends in Ecology & Evolution*, **17**, 15-21.
- Hoffman, M.L. (2000). *Empathy and moral development: Implications for caring and justice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (菊池章夫・二宮克美 (訳) (2001). 共感と道徳性の発達心理学—思いやりと正義とのかかわりで 川島書店)
- 市村 (阿部) 美帆 (2011). 自尊感情の高さと変動性の2側面と自尊感情低下後の回復行動との関連. 心理学研究, **82**, 362-369.
- 稲葉昭英 (1998). ソーシャルサポートの理論モデル 松井豊・浦光博 (編) 人を支える心の科学 誠信書房, pp.151-175.
- 板倉昭二 (2007). 乳幼児における感情の発達 藤田和生 (編) 感情科学 京都大学学術出版会, pp.113-141.
- 伊藤忠弘 (1997). 向社会的行動の発達 井上健治・久保ゆかり (編) 子どもの社会的発達 東京大学出版会, pp.167-184.
- 岩立京子 (1995). 幼児・児童における向社会的行動の動機づけ 風間書房.
- 加藤真由子・大西賢治・金澤忠博・日野林俊彦・南 徹弘 (2012). 2歳児による泣いている幼児への向社会的な反応—対人評価機能との関連性に注目して. 発達心理学研究, **23**, 12-22.
- 北村讓崇 (2011). 青年期における自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関連. 人間・環境学, **20**, 1-11.

- 黒川直美 (2001). 日本語における「励まし」の特徴と問題点. 横浜「言語と人間」研究会5月例会研究報告2001年5月26日 < <http://sekky.tripod.com/0105kurokawa.html> > (2013年6月11日)
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer. (本明 寛・春木 豊・織田正美 (訳) (1991). ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究 実務教育出版)
- Lennon, R., & Eisenberg, N. (1987). Emotional displays associated with preschoolers' prosocial behavior. *Child development*, **58**, 992-1000.
- 溝口 藍 (2011). 4, 5歳児における嘘泣きの向社会的行動を引き出す機能の認識. *発達心理学研究*, **22**, 33-43.
- 中村佳子・浦 光博 (1999). 適応および自尊心に及ぼすサポートの期待と受容の交互作用効果. *実験社会心理学研究*, **39**, 121-134.
- 中野友貴・正保春彦 (2011). 励ましの言葉の受け取り方に関する一考察—発話群・発話期待群の比較から. *茨城大学教育実践研究*, **30**, 13-25.
- 小川翔大 (2011). 他者からの同情によって生じる感情—出来事の原因帰属と相手との親密さによる感情の違い. *教育心理学研究*, **59**, 267-277.
- 小川翔大・中澤 潤 (2014). 慰めが受け手に与える効果の要因—半構造化面接による探索的検討. *千葉大学教育学部研究紀要*, **62**, 59-65.
- 岡田 努 (2010). 青年期の友人関係と自己—現代青年の友人認知と自己の発達 世界思想社.
- 尾見康博 (1999). 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究. *教育心理学研究*, **47**, 40-48.
- Palagi, E., Paoli, T., & Borgognini Tarli, S. M. (2004). Reconciliation and consolation in captive bonobos (*Pan paniscus*). *American Journal of Primatology*, **62**, 15-30.
- Paradise, A. W., & Kernis, M. H. (2002). Self-esteem and psychological well-being: Implication of fragile self-esteem. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **21**, 345-361.
- Romero, T., Castellanos, M.A., & de Waal, F. B. M. (2010). Consolation as possible expression of sympathetic concern among chimpanzees. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, **107**, 12110-12115.
- Romero, T., & de Waal, F. B. M. (2010). Chimpanzee (*Pan troglodytes*) consolation: Third-party identity as a window on possible function. *Journal of Comparative Psychology*, **124**, 278-286.
- 坂井玲奈 (2006). 思いやりに関する研究の概観と展望—行動に表れない思いやりに注目する必要性の提唱. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, **45**, 143-148.
- Samter, W., Burleson, B.R., & Murphy, L.B. (1987). Comforting conversations: The effects of strategy type on evaluations of messages and message producers. *Southern Speech Communication Journal*, **52**, 263-284.
- Schaefer, C., Coyne, J. C., & Lazarus, R. S. (1981). The health-related functions of social support. *Journal of Behavioral Medicine*, **4**, 381-406.
- 関山健治 (1998). 日本語の「慰め・激励」表現にみられる Politeness Strategy—話者の性別と社会変数による影響・大学生の場合. *白馬夏季言語学会論文集*, **9**, 11-17. 1998年4月1日 < <http://sekky.tripod.com/97hakupa.html> > (2013年06月11日)
- 周 玉慧 (1993). 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み. *社会心理学研究*, **8**, 235-245.
- 田中妙子 (2012). ドラマのシナリオに見られる「慰め発話」の諸相. *慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター紀要「日本語と日本語教育」*, **40**, 49-67.
- 田中俊明 (2006). 養育環境における親子の結びつきと対立. *子どもの未来科学研究*, **1**, 47-52.
- Underwood, B., & Moore, B. S. (1982). The generality of altruism in children. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press, pp.25-52.
- 浦 光博 (1992). 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学 サイエンス社.
- 脇本竜太郎 (2008). 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響. *実験社会心理学研究*, **47**, 160-168.

- 泉井みずき (2009). 被援助時の不快感情の発達—いつから助けられることを不快に感じるのか. 学校教育学研究論集, **20**, 1-15.
- Weiner, B. (1980). May I borrow your class-notes? An attributional analysis of judgments of help giving. *Journal of Educational Psychology*, **72**, 676-681.
- Weiner, B. (1985). An attributional theory of achievement motivation and emotion. *Psychological Review*, **92**, 548-573.
- Weiner, B., Graham, S., & Chandler, C. C. (1982). Pity, anger, and guilt: An attributional analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **8**, 226-232.
- Weiner, B., Graham, S., Stern, P., & Lawson, M.E. (1982). Using affective cues to infer causal thoughts. *Developmental Psychology*, **18**, 278-286.
- Wispe, L. (1986). The distinction between sympathy and empathy: To call forth a concept, a word is needed. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 314-321.
- 山口大輔・堀田法子. (2012). 採血後の幼児後期の子どもの対処行動と親の対応. 日本小児看護学会誌, **21**, 9-16.
- 山本真也 (2010). 要求に応えるチンパンジー—利他・互惠性の進化的基盤. 心理学評論, **53**, 422-433.
- Yamamoto, S., & Tanaka, M. (2009). Do chimpanzees (Pan troglodytes) spontaneously take turns in a reciprocal cooperation task? *Journal of Comparative Psychology*, **123**, 242-249.
- 山村麻予 (2013). 葛藤場面における「困窮者を援助しない」理由分類の試み—道徳判断水準からの検討. 大阪大学教育学年報, **18**, 21-36.
- 山崎勝之 (2006). ポジティブ感情の役割—その現象と機序. パーソナリティ研究, **14**, 305-321.
- Zahn-Waxler, C., Friedman, S. L., & Cummings, E. M. (1983). Children's emotions and behaviors in response to infant cries. *Child Development*, **54**, 1522-1528.
- Zahn-Waxler, C., & Radke-Yarrow, M. (1982). The development of altruism: Alternative research strategies. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press, pp.109-137.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., Wagner, E., & Chapman, M. (1992). Development of concern for others. *Developmental Psychology*, **28**, 126-136.

Review of consolation study: From two points of view of “provider of consolation” and “recipient of consolation”

Shota OGAWA*

Consolation is included in pro-social behavior and social support. However, those studies don't focus on originality of consolation. This paper reviewed consolation studies from two points of view of “provider of consolation” and “recipient of consolation”

From a point of view of “provider of consolation”, this paper marshaled benefit of consolation in a human relationship and factors of consolation behavior. Consolation contributed to not only decrease in recipient's stress but also reciprocal relation with close friend. In infancy, with cognitive development, consolation behavior increased. In childhood, consolation behavior was suppressed by concern that recipient is hurt by careless consolation.

From a point of view of “recipient of consolation”, this paper marshaled mechanisms and factors that consolation has positive effect or negative effect on recipient. When recipient of consolation appreciates understanding and acceptance of provider, recipient has a positive emotion. On the other hand, when recipient of consolation feels threat of ability, recipient

has a negative emotion. Factors of those recognitions are classified into (1) developmental factors, (2) stressor factors, (3) recipient factors, (4) provider factors, (5) relationship factors. And, when close friend didn't console the other, the other felt dissatisfaction.

From two points of view described above, this paper highlighted the need to further scrutinize about a nonverbal consolation for not hurting close others' feelings. And this paper argued research tasks of consolation.

Key words

Nonverbal consolation, Pro-social behavior, Social support, Encouragement, Reciprocal relationship.

*Doctoral Course The United Graduate School of Education
Tokyo Gakugei University, Division of Study on Structure
of Education

慰め研究の概観と展望： 「慰めをする人」と「慰めを受ける人」の視点から

小 川 翔 大*

慰めは、向社会的行動やソーシャルサポート研究の一部として扱われており、その独自性は論じられてこなかった。そこで本稿では「慰めをする人」と「慰めを受ける人」の二つの視点から慰めに関する研究をレビューした。

「慰めをする人」の視点からは、慰めが人間関係にもたらす恩恵と、慰め行動の生起に影響する要因を整理した。慰めは受け手のストレスを減少させるだけでなく、親密な友人との互恵的関係の維持にも貢献していた。乳幼児期では、身体接触などの非言語的な慰め行動がみられ、認知的発達に伴って慰め行動の頻度や種類は増加していた。また、児童期以降になると相手を傷つける懸念によって慰め行動が抑制される場合もあった。

「慰めを受ける人」の視点からは、慰めが受け手にポジティブ・ネガティブに働くメカニズムと、それらに影響する要因を整理した。慰めがポジティブに働くメカニズムは、慰めの受け手が「相手が自分を理解して受け入れている」と評価することであった。また、慰めがネガティブに働くメカニズムは、慰めの受け手が「慰めによって

自分の能力や評価が脅威にさらされている」と評価することであった。それらの評価に影響する要因を、(1) 発達の要因、(2) 出来事の原因、(3) 慰めを受ける人の個人内要因、(4) 慰めをする人の要因、(5) 関係性の要因に分類した。そして、親密な関係の人から慰めが得られない場合、慰めの受け手は心理的不満を感じていた。

以上を踏まえ本稿では、落ち込んでいる友人を慰める時に友人を傷つけない非言語的な慰めを検討する必要性を論じ、慰め研究の今後の課題をまとめた。

Key words

非言語的な慰め、向社会的行動、ソーシャルサポート、励まし、互恵的關係

*東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）教育構造論講座